

たろばな 京都大学男女共同参画推進センター Gender Equality Promotion Center

シンポジウム シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン 8 「日本の大学におけるダイバーシティー - 成果と課題 -」

シンポジウム シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン 第8回「日本の大学におけるダイバーシティー - 成果と課題 - : Global Perspectives on Diversity in Japanese Universities - Benefits and Challenges」(共催: 学生総合支援センター キャリアサポートルーム)を、5月23日(金)に開催しました。

「男女共同参画推進センター」は、本年4月に「男女共同参画推進室」と「女性研究者支援センター」を統合して誕生しました。今回は、そのキックオフ・シンポジウムの意味も込め、グローバル化時代に羽ばたく外国人研究者を男女一貫ずつお招きし、日本の大学におけるダイバーシティと男女共同参画について、英語でご講演をいただきました。

講演者のシーレ・ニコーマック (Sile Nic Chormaic) 准教授はアイルランド出身で、パリ大学で物理学の博士号を取得後、現在、沖縄科学技術大学院大学 光・物質相互作用ユニットに勤務されています。ベンジャミン・マクレラン (Benjamin McLellan) 准教授はオーストラリア出身で、クィーンズランド大学で化学工学の博士号を取得後、持続可能な発展のための工業デザインなどを研究し、本学エネルギー科学研究科に所属されています。

司会進行は、マクレラン先生と同僚でもある山本 英嗣・男女共同参画推進センター 広報・相談・社会連携 WG 主査が行いました。

はじめに、稲葉 カヨ 副学長より挨拶があり、京都大学の男女共同参画とシンポジウムの趣旨について説明がありました。

そして、ニコーマック先生より、日本の大学の変革のために「女性で外国人の教員の視点から」"Breaking the trend in Japanese universities - viewpoint of a female and foreign faculty

member" の講演をいただきました。

ニコーマック先生は、アイルランドの Limerick に生まれ、ダブリンの郊外 Leixlip で育ちました。アイルランド国立大学メイヌース校で、数理論理学士号を取得後、水素電子衝突について研究し、物理学修士号を取得されました。

アイルランド国立大学は、歴史的に、カトリックの司祭を養成するために設立された大学ですが、科学・数学を学ぶ女性の学生を全面的に支援してくれる恵まれた環境でした。修士課程終了後は、パリ大学 XIII 校に留学し、原子干渉法 (atom interferometry) の博士号を取得されました。研究室に入った初日に「フランス語を一ヶ月学んで下さい。その後は、私たちは、あなたのために英語で話しません。」と言われた時は驚いたそうですが、フランスには、女性科学者が活躍した伝統があり、研究に専念することができたそうです。博士号取得後は、オーストリアのインスブルック大学に移り、研究員として研究を進められました。インスブルック大学でも、Anton Zeilinger 教授という女性科学者を強力にサポートしてくれる研究者と出会い、研究活動を発展させることができたと話されました。

オーストリアでは、リーゼ・マイトナー財団から研究助成を受けられました。これは、ニコーマック先生が、ジェンダーの問題を考えるきっかけにもなりました。マ



Global Perspectives on Diversity in Japanese Universities

イトナーは、オーストリアの物理学者で、放射線・核物理学の分野で何度もノーベル賞の受賞候補になった女性科学者ですが、その業績は正しく評価されなかったといわれています。自然科学分野の優れた女性科学者の研究成果がきちんと評価されず、男性研究者に業績を奪われる形になってしまった過去のケースを知り、自分は恵まれた環境で研究を続けることができた、と思いながらも、問題意識をもつようになったそうです。

その後、3年間、オーストラリアのメルボルン大学で研究を続けられました。ここでは、女性の理系研究者と学生を支援するプログラムに初めてかかわり、その仕事を通じて、ご自身のキャリアパスにおいても、ジェンダーによる偏見もしくはハラスメントがあったのではないかと考えるようになったそうです。

1999年には、ドイツのマックス・プランク量子力学研究所で客員研究員として、テオドル・ヘンシュ教授(2005年ノーベル物理学賞受賞)と研究を行いました。ドイツでは、女性科学者の数が少なく、研究所の女性たちの苦勞を垣間見たそうです。その後、アイルランドに戻られ、コーク工科大学、ユニバーシティ・カレッジ・コークの二つの大学で教員として勤務されました。しかし、ジェンダーの壁、ガラスの天井を感じ、もう一度、外の世界にキャリアパスを求めることになりました。そして、2012年に、南アフリカのクワズール・ナタール大学の名誉准教授と、日本の沖縄科学技術大学院大学(OIST)の准教授という二つの職を得られました。

OISTでは「光・物質相互作用ユニット」で研究室を運営するとともに、日本が「2020年までに女性の指導者を30%にする」という男女共同参画政策の目標を達成できるように、一緒に事業を推進して行きたいと考えて活動をされています。OISTには「ジェンダー平等タスクフォース」があり、育児休業支援、「デュアルキャリア支援」などの事業を行っています。同僚の「オイスターズ(OISTers)」から送られた京大へのメッセージもスライドで紹介され、ご講演を締めくくられました。



次に、京都大学のマクレラン先生より、外国人教員「自由とフラストレーション: "Foreign faculty - freedom and frustration"」のご講演をいただきました。マクレラン先生は、オーストラリアのクィーンズ大学で学位を取得し、同大学で研究フェローとして勤務されました。その後、パートナーが日本人であったこともあり、2010年から、京都大学エネルギー科学研究科エネルギー社会・環境科学専攻に着任されました。

ご自分の経験、また他の外国人教員から聞いた話などから、日本の大学における課題についてお話されま

した。はじめに、京都大学のミッション・ステートメントには、「研究の自由と自主を基礎に」(freedom and autonomy in research)、「自学自習を促し」(promote independent and interactive learning)、「自由と調和に基づく知」(knowledge informed by the ideals of freedom and peaceful coexistence)、「学問の自由な発展に資する」(to enhance the free development of learning)、「組織の自治」(administrative independence)など、「自由」に関する言葉がたくさん使われていることを指摘されました。

まず、この「自由」という言葉は、いろいろな角度から考えるべき概念であることを、二人の歴史的人物の言葉を用いて紹介されました。イギリスの歴史家チャールズ・キングスレーは「自由には2種類ある。自分の好きなことと自由に行為するの自由と、自分のなすべき事柄を自由に行なう真の自由である」と述べています。また、南アフリカの運動家・政治家であったネルソン・マンデラは「自由であるというのは、単に己の鎖を脱ぎ捨てるだけではなく、他人の自由を尊重し、向上させるような生き方をするのである」と述べています。

マクレラン先生は、大学における「自由」がもたらす実用性(practicality)とフラストレーションについて、「個人」「文化/集団」「組織/制度」の三つの段階に分けて考察されました。「個人」レベルでは、本人のスキル、友人、仕事や生活面での課題があります。「自由」は時として、「孤立」「不安」「方向性の欠如」を起こさせます。特に外国人の場合、日本語をうまく操ることができず、意思疎通の困難さに直面した時などに「焦燥感」を感じることもあるのです。

「文化/集団」レベルでは、自由であるかのようにみえても、実際には、職場には「暗黙のルール」「共同作業」「外国人教員に期待される役割」といった目に見えない縛りがあります。これに反して、文化的に許容されないことや期待されないことをやってしまっ、注目を浴びてしまう人もいれば、慎重に無意識の「抵抗」を試みる方もいます。その一方、代替案を示して説得したり、慎重に無意識の「同化」を行なっている方もいるのです。

「組織/制度面」では、大学での事務手続きを例としてあげ、外国人にとって、日本語による事務手続きそのものが、フラストレーションになっていることを、知っ



-Benefits and Challenges



で欲しいと話されました。日本語での会議ならば、日本語を母国語としないメンバーへの配慮も必要です。母国語の違いだけでなく、各自が持つ、文化的な背景も考慮し、組織での意思決定プロセスを、慎重に、かつ迅速に、進めることが必要であると思うと話されました。

最後に、まとめとして「自由は必ずしもよいことばかりではない」、「十分なコミュニケーションがなければ、自由は、フラストレーションに変わってしまう」、「組織としての成果のためには、個人の自由裁量に、一定の制限がかかることは、当然である」、「言葉にされない、無

意識の要素は、アウトサイダーには理解できないということをお忘れず、コミュニケーションをとる必要がある」と解決策を提言されて、ご講演を結ばれました。

続いて、山末 英嗣 WG 主査の進行により、質疑応答とディスカッションを行ないました。ブランド力の発信を例として、京都大学の構成員がもつ名刺のデザインは、特に指定がなく、各自が選ぶ「自由」がありますが、グローバル化時代の今、学外へのアピールという点で、後れをとるのではないか、ということが話題に上りました。OIST は、研究環境としては自由ですが、名刺やホームページなどは、すべてトータルにデザインされていて、



ブランド形成を意識的に行なっているようです。その他、「グローバル 30 プログラム」の理想と現実などについても、活発な意見交換が行われました。

最後に、犬塚 典子 男女共同参画推進センター特定教授の挨拶により、盛会のうちに閉会しました。



連載：研究者になる！－第49回－

Rasに恋し、Rasに一途

生命科学研究所・助教
生沼 泉



早いもので、私が低分子量Gタンパク質の研究の世界に加わらせていただいてから、学生時代を含めると13年が経ちました。思い返せば、薬学部の卒研生として研究室に配属され、初めて挨拶に上がった際のこと。指導教授の根岸学先生（現在のポストもあります）は、「興味あることは何？」と私に尋ねてくれました。その際に「Rasです！」と間髪を容れず答え、先生に驚かれたことは、今でも懐かしくも新鮮な記憶です。低分子量Gタンパク質Rasに魅せられたのは、高校時代の頃です。その当時はRasの原がん遺伝子としての研究の黎明期～黄金期にあたる時代にあたり、高校生レベルが手にする雑誌でも話題として取り上げられていました。中でも「Rasというとても小さなタンパク質のアミノ酸のたった1カ所の変異で、細胞ががん化してしまう」ということを読み、その変異体Rasを体内に入れたというネズミが、親指大の大きな腫瘍塊を抱えている写真に衝撃を受けました。そんなこんなで、Ras(Rat sarcoma)タンパク質のパワフルさにすっかり魅せられました。

さらに遊べば、私の幼少期は原っぱや田んぼを遊び場にする少女でした。お金で買えるような玩具にはさほど魅力を感じず、野草や虫と遊び、鉄条網くぐりのできる衣服のかぎ裂きや膝小僧の大判絆創膏は日常茶飯事でした。亡き祖父が植物遺伝学の研究者で、遺品のノートの植物のスケッチの緻密さを見て感動し「なんか、格好いいなあ」と思ったのは小学生時代のことです。過酷な研究生活の中の貧乏暮らし、挙げ句の果てには徹夜続きで過労死したとかいう祖父の話をお父さんに聞かされ、ネガティブになるところか、それが武勇伝に思え、研究者という職業に余計に憧れていました。さらに、当時伝記で読んだキュリー夫人は、劣悪な部屋で暖をとるため、椅子を布団の上に重ねて重さの感覚で寒さをしのぐとしたのだとか。そのころから、絶対に「貧乏な研究者」になろうと思っていました。当時は「雑草」という言葉が嫌い、逐一見かけた植物の名前をお父さんに尋ねたり、自ら事典で調べたりすることで、研究者気分には浸っていました。研究

者になることしか考えていなかったの、高校卒業後の進路決定にあたっては全くぐれませんでした。

閑話休題。これは私のリサーチ不足だったのですが、実は、その当時の根岸研究室ではRasはやっていませんでした。そして、「うちではRasはやらないよ～」と言われ、失恋に似た落胆を覚えたことも記憶に鮮明です。私が配属された当初は、研究室ではRasの近縁の、同じく低分子量Gタンパク質のRhoファミリータンパク質の研究が精力的に行われていました。その中の一つ、Rndタンパク質の研究のプロジェクトに加わることになり、当初2年ほどは、Rasへの想いは片思いのまま胸にしまい、Rndタンパク質の結合分子として同定されていたプレキシシン(Plexin)という受容体タンパク質の機能に関する研究をしていました。ところが、研究（恋愛？）とは予測がつかない方向に進むのです。Plexinは1回膜貫通型受容体タンパク質であり、Plexin-A～Dの4つのサブタイプがあるのですが、私はふと、それらの細胞内領域にある共通に保存されたドメイン構造に目をとめました。「共通なものには何らかの意味があるかもしれない」と考え、解析した結果、Rasファミリー不活性化を触媒する(GTPが水解してGDPになるのを触媒する)酵素として働きうるドメイン構造であることがわかりました。その後、その酵素活性の存在を検証するつもりで、お世辞にも綺麗とは言えない、昼でも薄暗いRI実験室に通い、放射性同位元素(32P)でラベルしたGTPのトレース実験を一人深夜まで行い、シンチレーションカウンターの結果を解析する際のドキドキ感の良い思い出です。結果、幸運にもPlexinという受容体がRasの不活性化酵素として働くという、全く新奇な情報伝達機構の解明となりました。そういうわけで、長年の恋が実り、それ以来、一途にRasの研究をやっています。

毎日、人は眠ることで死を疑似体験しているとかいわれます。研究者それぞれにいろいろな研究スタイルや目標があるのだと思いますが、私自身は毎夜寝床につくときに、「今日は満足な仕事ができただけ」と思えるように、ただそれだけを目標に毎日やっているだけです。もちろん、周りのサポーターのみんなへの感謝の気持ちも、日々のエネルギーに換えて。次のポジションの問題も含め、未来の不安感に右往左往しそうなことも多々あるのですが、自分がどうにかできるのは現在だけなので、今まさにこの瞬間、現在の自分が何をすべきか、何をやりたいのかを一番に考えて、毎日毎日に全力を出すことが大事なのかなと感じています。さあ、今日もやるぞ～！

Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橘町

電話 075 (753) 2437

FAX 075 (753) 2436

E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>